

傷 擦

魔法少女リリカルなのはA's
フェイト×なのは 18禁小説本

PARALLEL ACT

傷捺

目次

第1章	5
第2章	14
第3章	21
第4章	32
第5章	40
あとがき	56

あらすじ

3
 フェイトへの虐めはさらにエスカレートし、机やブルマにに精液を掛けられる。そして男子に体育館裏へと連れて行かれたフェイトは下半身を剥かれる。

4

事件の裏側。

5

フェイトはリコーダーで処女を失う。そこになのが助けに入る。

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

フェイトが聖祥小学校に転入してくる。なのはといちゃいちゃする様子にアリサ達嫉妬。そして、フェイトがなのはにキスをしている写真が廊下に張り出される。

2

フェイトはクラス中から虐めを受ける。

第1章

1

妙齡みようれいの女性の後ろを、ピンク色の大きめなりボンでツイ
ンテールに纏めた、金髪の少女が歩いている。少女の顔は
こわばり、歩きもぎこちない。ガチガチに緊張しているの
が見て取れた。二人が歩いている廊下はそれ程長くないが、
その少女にとっては無限に続く様に思えた。

女性があるドアの前で立ち止まり、少女に一言告げた後、
部屋の中に入る。その部屋の中には整然と机が並んでおり、
少女と同じくらいの年齢の男女が座っていた。そして、手
を叩きながら壇上だんじょうに立つ。

「はい、皆さん静かに。突然ですけど、新しいお友達を
紹介します。なんと、海外からの留学生さんです」

部屋、教室のざわめきの種類が変わる。隣同士の席の子
は顔を見合わせて期待する。教室の誰もがどんな子が転入
してくるのか興味津々だ。ただし、その中の三人を除いて。

「フェイト・テストロツタさんです」

女性、先生がそう告げると、先程の少女が俯うつむきながら、
おずおずと教室の中に入って来た。

「可愛い」

「綺麗…」

男子も女子もフェイトの容姿に見とれる。何もしなくて
も可愛いが、緊張している様がさらに愛いとおしさを醸かもし出す。

「さ、フェイトさん。ご挨拶を」

「は、はい。え、えと、フェイト・テストロツサと言いま
す。学校に行くのは初めてだし、まだこっちの世界… 国
の事とか良く分からないので、教えて下さい。よ、よろし
くお願いします」

そう言っつて、ペコリと頭を下げる。教室は拍手でフェイ
トを迎え入れる。

一時間目は通常の授業に変わって、ホームルーム
イトを教室に馴染ませる配慮からだ。

フェイトの周りに人が群がり、矢継やぎ早はやに質問を浴び
せる。

「フェイトちゃんってどこの国から来たの？」

「日本語上手だね。どこで習ったの？」

「血液型は何？」

「向こうの学校ってどんな所？」

「え、えと……」

様々な質問が四方八方から投げかけられ、フェイトは口を口にする。こんなに大人数からいっぺんに話しかけられた事は初めてだ。それにまだ緊張も治まっていず、余計に混乱する。

「フェイトちゃん、凄い人気だね」

その様子を、なのはとアリサとすずかが遠巻きに眺める。この三人はフェイトと既に友達なので、あえて質問するとは何もない。

「あゝ、もうしょうがないわね」

フェイトの様子を見かねて、アリサがパンパンと手を叩きながら群衆に近寄る。

「そんなにフェイトをわやくしやにしない。フェイトが答えられなくて困ってるでしょ。聖徳太子じゃないんだから」

「アリサ……」

フェイトは、アリサの支援にホッと胸を撫で下ろした。

「はい、質問するなら独りずつ順番に！」

「じゃあ、僕！」

「あたし！」

質問権は独りずつでも、質問権を得るのには苦勞する。

「皆一斉に言ったら結局同じじゃない。よし、じゃあ、沙由理から」

仕方ないので、アリサが指名した。

「フェイトさんはどこの国から来たの？」

「えと、イ、イタリア……」

本当は別世界のミッドチルダからだが、そんな事は言える筈がない。以前なのはがアリサ達に訊かれた時にイタリアと答えていた事から、その質問が出たらイタリアと答える事にしていた。

「向こうの学校ってどんな所？」

「私は、学校には行つてなくて、家庭教師みたいな人に教わってたんだ」

「へえ」

リニスは、家庭教師でもあり、保護者であった。愛情も含めて全てを教わったが、あまり詳しく言うわけにもいかない。

「じゃあ、血液型は？」

「し、調べた事ない」

「誕生日は？」

「それは……」

まだまだ質問は続く。この分だと、上手くクラスにとけ

込めそうだと安心しながら、なのはとさすがが見守っていた。

2

「フェイトちゃん、お弁当食べに行こう」
「うん」

昼休み、なのは、アリサ、すずかの三人がフェイトをお弁当に誘う。聖祥小学校は私立なので給食がない。だから、お弁当を持参したり、購買部でパンを買うのが普通だ。給食に憧れる事もあるが、教室だけでなく、屋上や中庭など、好きな所でお弁当を広げられるのは楽しい。

「どう？ こっちの学校は？」

「うん、同年代の子達がいっぱい居るのって、初めてだから緊張する」

「フェイトって、今まで田舎で暮らしてたの？ それもお嬢様？」

「ん〜屋敷は広がったけど、周りは草原とか山ばかりだったから、田舎だったのかな」

「へ〜良い所に住んでたのね」

「そ、そうかな？」

たわいのないお喋りをしながら、中庭に着く。そこでシー

トを広げ、環になってお弁当を食べる。真冬ではあるが、今日は陽気だ。こんな時は、外の方が気持ち良い。

広げられたお弁当は、どれも美味しそうで、可愛らしく、バラエティーがあって見るだけで楽しめる。

「うわあ、フェイトちゃんのそのお弁当、リンディさんが作ったの？」

「うん。なんだか、朝から張り切っちゃって」

「少し貰っていい？」

「良いよ」

そう言っ、なのははフェイトのお弁当からおかずを一個、ひよいと箸で摘むと、口に入れた。

「美味しい！ リンディさん、意外に料理上手なんだね」

「そう？」

自分の母親みたいなリンディが褒められて、フェイトも嬉しい。帰ったら、リンディに褒められたことを伝えようと思った。

「じゃあ、お礼に私のおかずを上げるよ」

「そんな、いいよ」

「遠慮しない。交換なんだから」

「そう？ じゃ、じゃあ……」

なのはは、自分のお弁当からおかずを摘むと、フェイトの口元に持って行った。

「はい、あ〜ん」

「ええっ!？」

フェイトは差し出されたおかずには戸惑う。口元に食べ物運んで貰うなんて、まだ小さい頃、自分独りでご飯を食べられなかった頃以来だ。恥ずかしかったが、これも地球の習慣だと思い、口を開ける。

パクツ。口の中に肉汁が広がる。美味しい。なのはの母、

高町桃子さんの愛情が伝わってくる。

「んもう！ 何いちゃついてんのよ!!」

「ふええっ!？」

アリサが声を上げる。フェイトは、まだ口の中に物があるので、変な応答になる。

「全く、見せつけてくれちゃって。ねえ、すずかさん」

「そうね、アリサちゃん」

フェイトとなのはが真っ赤になって俯く。

「新婚夫婦？ ラブラブね〜」

「そ、そんなことないよ」

ようやく口の中の物を呑み込んだフェイトが反論する。

「言い訳なんて見苦しいわよ。罰として、これ貰い!」

「あ、それ最後に食べるのに!」

アリサが、なのはのお弁当箱から、なのは一番の好物を
 摘む。

「じゃあ、私はこれね」

「ど、どうぞ」

すずかは、フェイトのお弁当からおかずを失敬する。フェイトはなのはと違って拒否しない。

こうして、お弁当タイムとお昼休みはあっという間に過ぎて行った。

3

数日後の体育の授業の課題はバレーボールだった。クラスを六人ずつ五等分してチーム分けし、総当たり戦で優勝を決める。

なのはとフェイトが同じAチーム、アリサとすずかが同じEチームになった。今はAチームとBチームが、CチームとDチームがゲーム中で、Eチームは見学。アリサとすずかは、当然なのは達がいるAチームを応援する。

身体能力抜群のフェイトが、運動音痴のなのはをカバーしつつ、どんどんスパイクを決める。フェイトがジャンプする度に、ツインテールの髪が軽やかに揺れる。その様子に、すずかが見とれる。

「はあ… やっぱり、金髪の長い髪って素敵ねえ……」

「あたしも金髪で長いんだけど……」

アリサが苦笑して答える。

「……金髪の長い髪って素敵ねえ……」

「おい……」

「フェイトちゃんの足、白くて、細くて、長くて、綺麗ねえ……」

「あたしの足も白くて長いんだけど……」

「……フェイトちゃんの足、素敵ねえ……」

「……」

4

とある土曜日、なのは、フェイト、アリサの三人は月村家に遊びに来た。もちろんパジャマを持って。夕食をご馳走になった後はお風呂タイム。月村家のお風呂は、屋敷の広さに比例してとても大きい。一度に何人でも入れる。脱衣所もそれに合わせて大きく、着替えやすい。まるで温泉か銭湯みたいだ。

「なのはのパンツ可愛い……」

「え!?!」

なのはの穿いているパンツに一齐に注目が集まる。お尻に大きくキャラクターが印刷されているプリントパンツだ。ミッドチルダには無い種類のタイプなので、フェイトにとっ

ては珍しい。

「なのは、あんたまだこんなの穿いてるの?」

「いいじゃない! 可愛いんだから!」

「プリントパンツなんて子供がの穿く物よ、子供がの」

「うゝ私子供だもん!」

「……」

そのやりとりで、自分も欲しいと思ったフェイトが赤くなって俯うつむく。

「そんな事より、早く入りませよ。寒いわ」

「……そうだね」

四人は裸になると、バスタオルを巻いて浴室に入った。

「広い……」

フェイトがその広さに驚く。アースラや管理局の共同浴場並の広さがある。

「わーい、一番!」

アリサが走って浴槽に飛び込み、お湯しぶきが上がる。

「あ、最初に洗わないと……」

「気にしなくて良いわよ、ここは銭湯じゃなくて私の家なんだから」

「そうよ、無礼講、無礼講」

「で、でも……」

「そうだよ。だから……」

そう言って、なのはがフェイトの肩を強く押した。

「え？ きゃあああっ!!」

フェイトはバランスを崩して湯船に倒れ、またお湯しびき上がる。

「ぶはっ！ 酷いよ… なのは…」

「ごめん。そうれっ！」

フェイトの抗議の後、なのはも飛び込み、三度目のお湯しびき上がる。すずかだけは普通に入った。

「せつかく結んだのに、バラバラになっちゃった」

フェイトが、解^{ほど}けた髪を整える。

「ねえ、フェイトちゃん。アルファエイミィさんから聞いたんだけど、独りで髪を洗えないって？」

「な!? そ、そんなことないよ! ただ、目を開けられないだけ……」

フェイトは恥ずかしさで俯^{うつ}き、最後の声は小さくなる。

「じゃあ、私が洗ったげるよ」

「え? いいの?」

「うん。その代わりに、後で私の髪も洗ってね」

「うん」

「ハッ! 聞いてられないわね」

アリサが手を持ち上げて、首を振る。

「フェイトちゃんとなのはちゃん、本当に仲良いのね」

「聞いてるこっちが恥ずかしいわ。新婚さんじゃないんだから」

「え〜これくらい普通だよ〜」

「あ〜そういや、なのはのお母さん達もラブラブだったわね」

「血は争えないということね」

「う〜〜 ぶくぶくぶく……」

今は、フェイトだけでなくなのはも恥ずかしい。顔まで沈めて、蟹のように泡を出す。

「行こっ! フェイトちゃん!」

「え? あ……」

なのはは、フェイトの手を引っ張って湯船を出る。

「ひゅ〜ひゅ〜! 熱いねえ〜」

「……」

堪^{たま}らずその場を逃げ出したなのはだが、余計にからかわれる。なのはは冷やかしを無視して蛇口まで行き、フェイトを乱暴に座らせると、いきなりお湯を掛けた。

「キャッ!」

そのままシャンプーを掛け、ぐしゃぐしゃと泡立てる。

「痛い! なのは、もう少し優しく…… 痛っ!! 目に入っ
たっ!!」

「あっ!」 「めんっ!」

なのはは、ようやく自分が我を忘れていた事に気づき、
フェイトの目に入った泡を洗い流す。

「ごめんね、私……」

「うん、良いよ…… もう痛くないから……」

「今度は、もっと丁寧に洗うね」

「うん、ありがとう」

「ここ、痒かゆくな〜い？」

「うん、気持ち良いよ」

なのはとフェイトのラブラブ度はさらに上がったようだ。

アリサとすずかは、身体を洗いながらその様子を見る。

「あ〜あ、余計にいちやいちゃしてるじゃない」

5

お風呂から上がった後は、すずかの部屋に布団を敷いた。

幾らすずかの部屋が広いとは言え、二人分は辛い。

「ふう、どうにか敷けたね」

「二人分なら楽に敷けてたんだけどな」

「ごめんなさい……」

布団を敷くのが辛くなったのは、フェイトが増えた分だ。
それを申し訳なく思って、フェイトが謝る。

「何謝ってんのよ。別に責めちゃいないわよ」

「そうよ。私達が大人になったら、二人分の布団も敷けなくなるんだし。それに、私の部屋じゃなくても、もっと広い部屋があるから」

「そ、ど〜んと身体を預けなさい！」

と、アリサが胸を叩く。流石お金持ちの二人は違う。

「ありがとう、すずか、アリサ」

そうして、たわいのない話が夜更けまで続いた。

「ん〜」

真夜中、アリサがむっくりと起き上がる。

(トイレ……)

立ち上がると、なのはとフェイトの様子が目に入った。
二人向き合って、しっかりと手と手を握りしめて、すやすやと眠っている。

「全く、眠ってからもいちゃいちゃと……」

6

「プラスマランサー!!」

「シューッ!!」

境界内、黄色とピンクの光がぶつかり合う。四人でのパ

ジャマパーティーが終わって数日後、なのはとフェイトは早朝の魔法訓練にいそしんでいた。

「きやああつ！」

なのはは公園の噴水に墜落する。フィールドを展開したのでコンクリートに墜ちた事によるダメージは大きくなかったが、水浸しになってしまった。

「大丈夫？ なのは」

フェイトはトドメを刺すのではなく、心配して近くに降りた。

「平気！ 続き行くよ」

「でもびしょ濡れを乾かさないと」

「平気だって！ 実際の戦闘でも、川に落ちたり、雨が降ったりするんだから！」

「そう？ 平気なら良いけど」

本当は、水に濡れた時の対策ではなく、このまま勝ち逃げされるのが嫌だったからだだった。無理して訓練を続けたなのはは、すっかり身体が冷え、その日の授業中熱を出して保健室で寝込む事になった。

「失礼します」

フェイトは恐る恐る保健室を覗く。丁度保健の先生は不

在で、他の児童もいない。保健室にはなのはが独りベッドで寝ているだけだった。

「ごめんね、なのは。私が止めていれば」

フェイトはなのはの寝顔を覗き込む。暫く寝て落ち着いたのか、苦しくはなさそうだ。そんななのはをじっと見つめていると、段々となのはが愛おしくなる。次第にフェイトとなのはの距離が縮まり、二人の唇が重なった。

7

翌日、なのははすっかり回復した。迎えに行ったフェイトはその事を喜ぶ。二人はそのまま登校する。いつものように手を繋いで。

学校に行くと、なんだか廊下が騒がしい。掲示板に人混みが出来ている。二人が気になって近づく。その人混みが二人に気づくと、騒がしさの種類が変わった。ひそひそ話に変わり、二人との間に距離が取られる。不思議に思っただけを覗くと、驚きに思わず声を出した。

そこには、昨日、保健室でフェイトがなのはにキスした時の写真が貼ってあった。

フェイトの手が震え出す。恥ずかしい。それよりも、もしもなのはに……

結んでいた手が、そつと離される。

「なの…は……」

なのはは、そのままフェイトに距離を取り、握っていた手と、唇をさする。目には怒りと軽蔑が混じっていた。

「フェイトちゃん、私が寝ている間にこんな事したんだ……」

「なのは、聞いて、これは……」

「ファーストキスだったのに…… フェイトちゃん、大嫌い！ 絶交だよ!!」

そう言って、なのははその場から駈け出した。

「なの…は……」

フェイトは追いかける事が出来ず、立ちつくす。そのフェイトに、近づく者はいなかった。

第2章

1

フェイトは登校してきて、靴箱を開けた。そこから、「ゴミやちりが舞い出る。丁度顔に当たり、目を瞑つぶって咳せき込む。

「何？ これ？」

一瞬何が起こったか、理解できなかった。が、昨日一日中シカトされたのを思い出す。フェイトは、中から上履きを取り出し、逆さにして中に入っていたちりを払う。

「お早う」

「……」

「……」

廊下をすれ違った時も、教室に入った時も、誰も挨拶を返してくれない。昨日まで親しげに話しかけてくれたのが嘘のようだ。

自分の席まで行くと、机に「変態」「レズ」「最低」と様々な悪口が書かれているのに気づき、シヨックを受ける。幸

いにも、鉛筆で書かれていたので、席に着いて消しゴムを掛ける。

全ての落書きを消し終わると、なのはの席の方を見た。いつもなら、別の時間に登校しても直ぐに話しかけてくるのに、席に座って前を向いたままだ。フェイトの方に振り向く気配はない。むしろ背中から拒絶感が伝わってくる。

昼休み、フェイトはなのはに声を掛けようとするが、なのははそれより先に、アリサとすずかに声を掛け、教室を出て行ってしまった。追いかけることが出来ずに立ち止まったフェイトの周りで、ひそひそ声がある。フェイトは堪たまらず教室を出て、なのは達と反対の方向に向かう。独りで食べるお弁当の味はしょっぱかった。

「ねえ、なのは。このままで良いの？」

「仲直りした方が良いんじゃない？」

「良いよ。フェイトちゃんなんて知らない！」

「でも……」

「お弁当食べよ」

アリサとすずかは顔を見合わせる。なのはは、下を向い

て弁当を食べていたため、その時の表情は見えなかった。

フェイトがお弁当を食べて教室に戻ってくると、今度は油性マジックで悪口が書かれていた。フェイトは、仕方なく悪口が書き込まれた机の上で教科書とノートを広げる。

2

午後の最初の授業が終わった後、フェイトはなにげにトイレに行く。用を足しながら、俯く。なのはに早く謝りたい。いじめられてるのが自分だけで、なのはは被害者として、いじめの対象となっていない事が、少しフェイトの心を和らげる。

どたどたと個室の外で音がする。ガタガタとドアが揺れる。

「?」

トイレの水を流し、ドアを開けようとするが開かない。

「あれ?」

ドアは少しだけガタガタと動くが、大きく開かない。

(どうして? 閉じこめられた?)

フェイトは青ざめて「出して」と叫ぶが、外には既に人

がいる気配がない。そうこうしている内に、次の時間の始業のチャイムが鳴った。こうなったら、ドアをよじ登るより仕方がない。便座の上に登っても、小学生の背ではぎりぎりドアの上に手が届く程度。フェイトは、力を振り絞って、ようやくドアの上によじ登る。魔法を使えば簡単だが、校内で魔法を使うわけにはいかない。

十分程遅れて、教室に入る。

「すみません、遅れました。その、トイレに行つて……」
「でつかいのしてたんだ!」

男子の叫びで、教室が笑いに包まれる。フェイトの顔が真っ赤になる。恥ずかしさで逃げ出したいのをどうにか堪えた。

「女の子にそんな事言っんじゃありません。フェイトさん、次からはもう少し余裕を持ってね」

「はい……」

すっかり大便で遅れた事になってしまったが、トイレで閉じこめられたなど言えない。フェイトはまだ笑いの残る教室を歩いて、自分の席に着いた。

「いッ!」

お尻の右側に激痛が走る。痛みで脂汗を流しながら、少しでも腰を浮かして触ると、金属の感触がある。取って見ると、画鋏だった。フェイトの視界が滲む。

数日後。朝からの雨で、昼休みになっても校庭や中庭に出られず、教室にいる児童が多い。席に座って、本を読んでいるフェイトに偶然手が当たった娘がいた。

「いやあっ！ フェイトに触ったっ!!」

「うわあっ！ レズが移る！」

「近寄るな！」

クラスメートはその娘を中心に散って行く。

そして、フェイトにそろそろと片手を伸ばして、近づくと男子がいる。フェイトの肩に触れると、「タッチ！」と叫んだ。

「いえい！ レズが移るぞ!!」

「うわー!!」

「キヤー!!」

今度は、その男子が中心になって逃げる。適当な人間に追い付いてタッチすると、今度はその人が追いかける。フェイトに触った者が「鬼」となるルールのようなのだ。

フェイトはじつと堪える。心を押し殺せば、痛みも少ない。教室が鬼ごっこで騒がしい中、なのはは、悲し気な顔で、

その様子を見ていた。

下校の時間、雨はまだ降り続けている。フェイトは傘立てから自分の傘を探し、開く。

「……」

布は落書きされた上にズタズタに切り裂かれ、骨も何本か折れている。これではとても使い物にならない。フェイトは無言のまま傘を閉じる。玄関から空を見上げる。一向に止む気配がないが、仕方がない。雨の中帰ろうとしたところに、声をかけられた。

「フェイトちゃん！」

懐かしいなのはの声だ。声をかけられたのは何日ぶりだろう。

「ごめん、フェイトちゃん。私の所為で、こんな……」

「どうして謝るの？ みんな私が悪いのに……」

フェイトは振り向かず答える。

「私、もう怒ってないよから。そりゃ、あの時はびっくりしたけど……」

「……」

「もう、私！ フェイトちゃんが虐められるの見てられない！ 明日、皆に言っから！」もうフェイトちゃんを虐め

るの止めて』って!」

「駄目!!」

フェイトの予想外の否定に、なのはは戸惑う。

「フェイトちゃん……」

「私と、話しているの見たら、なのはが虐められるよ。」

今はなのはは被害者だから、虐められてないけど……」

「共犯だよ! だって、私もフェイトちゃんのこと好きだもん!」

「……」

暫く玄関は雨の音だけになる。

「ありがとう。でも……」

「これ、使って」

なのはは、自分の傘をフェイトに押し付ける。

「駄目だよ、これじゃあ……」

「ううん。平気だよ、これくらい。せめてもの罪滅ぼしさせて」

そう言っ、なのはは鞆を傘代わりに、雨の中に消えていった。フェイトはなのはの傘を、ギュッと、愛おしく抱きしめる。

「ありがとう、なのは……」

4

翌日、なのはは風邪を引いて学校を休んだ。やはり、雨に濡れたのがいけなかったようだ。

そして、その日の体育の授業は水泳だった。聖祥小学校のプールは温水プール。その為に、水泳クラブは一年を通して活動できる。毎回というわけではないが、数回に一度は冬でも水泳の授業がある。それは児童の楽しみの一つとなっていた。

この日の授業は、クロールや平泳ぎを何本か。普段と同じように授業は進む。そして、授業の最後の十分間、自由時間となった。普通の児童にとって最も楽しい時間、しかし、フェイトにとっては最も苦しい時間となった。

「フェイトちゃん」

「え!？」

久しぶりにクラスメイトから声を掛けられ、振り向く。その気が抜けた瞬間……

「!？」

フェイトの足が引っ張られ、水中に引き摺り込まれた。フェイトは必死にもがくが、水面に届かない。何とか顔を水面に出せそうになると、今度は上から押さえつけられる。水泳帽は脱げて、解けた髪がさらに引っ張られる。

(助けて！)

誰も助けてくれない。遠目にはじゃれ合って遊んでいるように見える。

フェイトは荷物をひっくり返して探す、やっぱり見つからなかった。

何リットルも水を呑み、動きが鈍くなった所で、流石にヤバイと思われたのか、解放される。朦朧とする中プールサイドに打ち捨てられた。

「うげーっ！ げふ、げふっ!!」

呑み込んだ水を吐き出す。胃液が混ざったその水は僅かに黄色い。髪は乱れて絡み付き、顔は鼻水と涙でぐちゃぐちゃ。目も腫れて、普段の美少女の面影はない。

「くすくすくす……」

せめてもの幸いは、その無様な様子を嘲笑するクラスメートの声が聞こえなかったことだ。

フェイトは、一番遅れて更衣室に入る。体力を使い切っ
てしまい、ふらふらで壁により掛かりながら進む。何とか自分のロッカーまで辿り着き、着替え始める。

「ああっ……!」

(ない! どこにもない!)

フェイトはとぼとぼと教室に戻る。まだ体力が回復して
いないのだろうか？ 歩き方がぎこちない。内股で、すば
すばと歩いている。

廊下の掲示板の前に、人だかりが出来ている。しかし、
今のフェイトには、それに興味を示すだけの体力も好奇心
もない。別のことに意識が集中している。

「フェイトが来たぞ」

「やっぱり……」

「くすくす……」

フェイトについての囁きが起こるが、気に留めない。無
視して教室に入ろうとする。

「おい、待てよ」

教室のドアの前で、男子が立ちふさがって通せんぼを
する。

「あれ、見てみるよ」

男子は、人混みの中心部を指さす。フェイトは仕方なく
掲示板に向かう。そして、掲示板の展示物に目を疑った。

「あっ!?!」

フェイトの顔が真っ赤になる。展示してあったのは、無くなったフェイトのパンツだった。ご丁寧に「フェイトのパンツ」と説明書きもある。あまりの恥ずかしさに、身体が震える。

「やっぱりフェイトのパンツか」

「じゃ、今何穿いてんだ？」

「ノーパンじゃね？」

「ブルマくらい穿いてんだろ」

「確かめてみるよ」

その会話が耳に入り、フェイトが身構えるよりも早く男子が近づき、フェイトのスカートを捲めくった。

「ひゃっ！」

辛うじて前は押さえられたが、スカートの後ろは舞い上がり、小ぶりの可愛いお尻が衆人に晒さらされてしまう。

「うお〜！」

「ノーパンだ！」

「ノーパンだ！」

「ノーパン！ ノーパン！ ノーパン！」

辺りをノーパンコールが覆う。

「うっ、うっく…… うっく……」

フェイトは耳を押さえてうずくまり、恥ずかしさのあまり泣き出してしまふ。穴があったら入りたいというのは、

こういう状況を言っただろう。この場から自分の存在を消したくなった。

「ちよつと男子！ いい加減にしなさいよ!!」

一人の少女が叫び、辺りを沈める。その少女、アリサは掲示板に貼られているフェイトのパンツを剥はぎ取ると、フェイトに渡した。

「はい、フェイト」

「ア、アリ…… うっく…… サ……？」

嗚咽おえつは急には止まらない。懐かしい友人の声、フェイトはアリサの顔を見上げる。

「ごめんね、今まで助けてあげられなくて。でも、もう大丈夫よ」

「フェイトちゃん、行く」

アリサがフェイトに優しく語りかける。そしてさすがが、フェイトの肩を抱いて立ち上がらせ、その場を離れる。好奇の目に晒されているフェイトを避難させる必要がある。それに、パンツを皆が見ている中で穿くわけにはいかない。人目の付かない所に行かないと。

女子トイレに着くと、すずかはフェイトを個室に入れる。流石にすずかの前でも、パンツを穿くのは躊躇ためらわれる。風

呂場の脱衣場では何ともないが、ここは学校だ。個室の中で、フェイトは一旦靴を脱ぎ、パンツの穴に足を通して、引き上げる。

個室から出てきたフェイトを、すずかが抱き締めた。

「ごめんね、フェイトちゃん。今まで助けてあげられなくて」

「うん、気にしてない。私をかばったら、今度はすずかやアリサが虐められるでしょ。私だけなら良いけど、すずかやアリサまで虐められたら……」

「うん。だから私もアリサちゃんも、ずっと助けられずにいたの。でも、もうこれ以上親友が虐められるのは見えないわ」

「すずか……」

「一緒に闘っていきましょう」

「ありがとう……」

フェイトはすずかに胸を預けて、微笑む。笑うことが出来たのは何日ぶりだろうか？ その感覚を、暫く忘れていた。

その日、三人は久しぶりに一緒に帰る。しかし、幸せな時間は短かった。

第3章

1

登校したフェイトは、鞆から教科書やノートを取り出し、机の中に移し替える。

びしょ……

フェイトの手に妙な感覚がある。なにやら、ぬるぬるした液体の感触。

「何？ これ？」

フェイトは教科書を一旦机の上に置き、手に付いた、少し白く濁った透明な液体を眺める。液体がとろりと流れ、机の上に滴る。今まで嗅いだ事のない異臭もする。

「きゃあああっ!!」

フェイトの様子を見たクラスの女子が悲鳴を発する。ガタガタと、机にぶつかるのにも構わず、急いでフェイトから遠ざかる。

「な、何？」

女子の目が冷たい。まるで汚らわしい物を見るような目だ。今までもフェイトを見る目は冷たかったが、その比ではない。それに対して、男子の目はにやにやといやらしい。「ちよつと……」

アリサがフェイトに耳打ちし、教室から連れ出す。トイレまで連れて来ると、手を念入りに洗わせる。

「しつかりと落としてよ、それ」

「うん。これ、なんなの？」

「精子よ」

「精子？」

聞いた事のない単語だ。

「保健体育で習わなかった？」

「ううん」

「そっか、フェイト学校行ってなかったんだよね」

アリサは、軽いため息をつく。

「赤ちゃんの素よ」

「赤ちゃんの素？」

「お母さんのお腹の中にある卵子と、精子がくっついて赤ちゃんになるの」

「そうなんだ」

ふとプレシア・テストロッサの顔が浮かぶ。初めて知る

生命誕生のメカニズム。しかし、自分はそうやって生まれてこなかったんだと思うと、悲しい。

「感心してないの。精子がどこから出てくるか知ってる？」

「ううん」

精子という単語も初めて聞いたのに、知っているわけがない。

「男の子のペニスから出てくるのよ」

「ペニス？」

「おちんちんの事よ」

「……ええっ!？」

「そ、おしっこと同じ所から出てくるの」

「えええっ!？」

赤ちゃんの素とおしっこが同じ所から出てくる？

フェイトは、生命の誕生に関わる物と排泄物が同じ場所で扱われていると知り、ショックを受ける。

「それで、ペニスを膣に差し込んで、精子を出すの」

「膣？」

「女の子の、お尻の穴と、おしっこの穴の真ん中にある穴よ。そこに、ペニスを差し込むの」

「ペニスを差し込む…… おちんちんを身体の中に入れる

の!？」

「そっよ」

「……」

フェイトは、その事をにわかには信じられなかった。お尻やおしっこの穴以外にも穴が開いている事、ましてや、そこに男の人がおしっこを出す所を入れるなんて。さらに、そうする事で赤ちゃんが出来るなんて。

「何ぼくとしてんのよ」

「あ、ご、ごめん……」

「で、その精子がフェイトの机の中に掛けられてたの!」

「え、そ、それって……」

「質の悪い悪戯いたずらに決まってるじゃない」

「でも、赤ちゃんの素を掛けてどうするの？」

今度は、逆にアリサがあっけに取られる。

「た、楽しいんじゃない？」

「そうなの？」

「とにかく、気をつけなさいよ」

アリサは、次の科白せりふをフェイトの耳元で囁く。

「妊娠しちゃうかもしれないから」

「!？ え？ おちんちんを膣に入れて……」

「普通は膣の中で精子を出さないと妊娠しないけど、たまに膣の外側に付いただけで妊娠する事もあるんだって」

「そうなんだ」

「想像してみて、自分が妊娠するのを……」

そう言われて、フェイトは自分が妊娠したらどうなるか想像してみる。赤ちゃんが出来るのは嬉しいかもしれない。でも、自分の身体が変わってしまう事に、何とも言えない不安が生まれ、大きくなって行く。

その事を想像していると、ホームルーム前の予鈴のチャイムが鳴った。

「あ、チャイムが鳴ったわ。早く行きましょ」

「う、うん……」

二人は、急いで教室に戻る。

フェイトは席に着く。精液まみれの机では、教科書やノートが汚れてしまう。ティッシュを取り出し、精液を拭き取る。少し乾き始めていたのか、完璧に拭き取るのに苦労する。何より、時間が経ったために異臭が増している。鼻を近づけなくても臭い。「赤ちゃんの素」の筈なのに、他の女子が悲鳴を上げて逃げ出した理由が分かった気がした。フェイトの席の周りの空間が、普段よりも広い。

今日の一時間目の授業は体育。ホームルームが終わると、女子は一斉に更衣室に向かった。その時、フェイトを見て嫌悪感を示す者だけでなく、にやにやと笑う者がいる。

嫌悪感はこちら数日いつもの事だ。それに今日は机が精液

まみれにされて事も加わる。にやにや笑いは何だろうか？ やはり、精液まみれにされた事だろうか？ その理由は、直ぐに分かった。

更衣室に入り、適当な棚を確保すると、袋から体操服を取り出す。最初にブルマを穿こうとして、異変に気づく。ブルマの内側に、白くべっとりとした液体がこびり付いている。何かを確認するために顔を近づけると、僅かに先程教室で嗅いだ臭いがする。

(精子!?)

机の中に掛けられていた液体と、粘性と臭いの濃さが違うが、おそらく精子だろう。皆の様子が普段と違ったのは、この事を知っていたからに違いない。

(どうしよう？ アリサ……)

フェイトはアリサに助けを求めようと、彼女を目で捜した。その時、タイミング良くアリサが声を掛ける。

「フェイト、まだ着替えてないの？」

「ア、アリサ、あの……」

「ブルマ持ってるだけじゃしょうがないでしょ。早く穿きな」

「でも、これ……」

「急がないと先生に怒られるわよ。じゃ、一分で来なさいよ」と、フェイトが口籠もっている間に、アリスはさっさと体育館に行ってしまった。

(どうしよう?)

悩んでいる時間は無い。フェイトはポケットからティッシュを取り出すと、急いで精液を拭いた。焦っているので、ティッシュからはみ出した精液が指に付着し、拭き取る対象が増えてしまった。それは、冷たくべたべたして、取れにくい。指でも取れにくい精液は、布だとさらに取れない。取るうと思って擦ると、ブルマに染み込む。

そうこうしている間に始業のチャイムが鳴る。フェイトは、仕方なくブルマを足に通して一気に引き上げる。ワンピースの制服を一気に脱ぎ、上着を着る。そして制服を棚に押し込んだ。皺になるが仕方がない。

走って体育館に向かい、既に整列している列に入る。

「フェイトさん、遅刻ですよ」

「すみません!」

「くすくすくす……」

周りから笑いが漏れる。遅刻した事に対してだけでなく、フェイトが精液を付けられたブルマを穿いていると知って

いる笑いだ。

今日の授業はバスケットボールだった。試合していないチームは、コートで見学する。フェイトのチームは、最初見学だった。

動かずに座っていると、ブルマに残った精液の液体成分が、段々とパンツに染み込んで行くのを感じる。気化熱でひんやりとする。それが精液であるかどうかに関わらず、濡れた下着は気持ちの良いものではない。

「うわ! こいつ、おしっこ漏らししてやがる!」

男子が、体育座りしているフェイトの股間を見て叫んだ。

「え!？」

フェイトは、自分の股間を覗き込んだ。精液の液体成分が、内側のパンツだけでなく、ブルマの布も濡らし、外側から濡れているのが見えた。

最初に叫んだ男子だけでなく、他の児童もフェイトの股間を覗き込む。

「ち、違う!」

そう反論して、フェイトは足をすぼめて股間を隠す。別に濡れていなくとも、股間を眺められるのは気持ちの良いことではない。

「じゃあ、何で濡れてんだよ！」

「そ、それは……」

ブルマに精液が掛けられていたなどと、言えるわけがない。フェイトは返答に詰まる。

「なんか臭うぞー！」

「フェイト臭え!!」

フェイトの股間から、時間が経って強くなった精液の臭いが、周りにも広がり始めた。自分の股間が汚臭おしきの発生源になったことで、恥ずかしさが倍増する。この場から逃げ出したい。とても顔を上げられない。

「そこ！ 何を騒いでるの!? ちゃんと応援しなさい！」

先生の注意で、立っていた児童はフェイトを覗き込むのを止め、騒ぎは収まる。しかし、ひそひそ声は止まやまない。

「お漏らし……」

「小便垂れ……」

「生ゴミ……」

「シーシー……」

「長ながうんこ……」

「淫乱……」

「スペルマ……」

「やりまん……」

「妊娠……」

幾つかの卑猥な単語の意味は分からなかったが、悪口と言っただけは分かる。そして、「妊娠」と言う言葉で、アリサが「膈の外側に付いただけで妊娠する事もある」と言っていたことを思い出す。もしかして、自分も妊娠するかもしれない。赤ちゃんは嫌いではない。でも、今の自分が産むとなると、話は単純でない気がする。自分のお腹が大きくなる様を想像する。そして、子供を産んだ後育てられるんだらうか？ とても育てられる自信は無い。そしたら子供はどうなるんだらうか…… そんな事を考えていると、言いよう無い不安が生まれてくる。それを、アリサが「たまに」と言っていた事を信じて誤魔化した。

2

放課後、下校時間。フェイトは下駄箱で靴と上履きを交換する。今日も一日疲れた。アリサは「心配しなくて良い」と言っていたが、完全に心が晴れる事はなかった。

フェイトは一人玄関のドアをくぐる。アリサやずかは用事があった、一緒に帰れない。

「おい、待てよ」

玄関の外で、数人の男子が通せんぼする。戸惑とまどっていると、後ろにも現れて、囲まれた。

「ちよつと面貸しな」

そう言つて、リーダー格の男子、宮本がニヤニヤと笑う。今度は何で虐められるのだから？ 逃げたいけれども、既に囲まれているので逃げられない。フェイトは仕方なく、体育館裏と言つ、人気の少なさと、虐めの実施場所では定番の場所に連れて来られる。

「フェイト、お前女が好きなんだよな？」

「……」

思い出した。そう言えば、フェイトがなのはにキスをしている写真を、掲示板に貼られた事からこの虐めは始まったんだ。それで、クラスの皆はもちろんなのは達も離れて行つたんだ。今は、なのはやアリサ・すずかが側にいてくれるけど。

そう思うと、心が落ち着く。男子もあまり恐くない。これから殴られたりするのかもしれないけど、耐えられる。

「おい、答えるよ！ 女が好きなんだよな!？」

宮本子はフェイトの胸ぐらを掴む。それでも、フェイトは落ち着いている。

女の子が好きと言つより、なのはが好きなんだ。なのは

の事を想い浮かべると、顔がほのかに火照る。

「おい、こいつ赤くなってるぞ」

「やつぱさうか」

取り囲んでいる男子がニタニタと笑う。

「よし、じゃあ、これからフェイトが男じゃないか検査をする!」

「え?」

フェイトは宮本の宣言の意味が飲み込めなかった。なぜ自分が男だと思われるのか？

「女を好きになるのは、男だからな。だから、フェイトは男だ」

「……」

あまりの馬鹿らしさに、フェイトは呆れるが、そう言つてられなくなる。宮本が目配せすると、フェイトは後ろから肩と腕を掴まれ、固定される。それも右と左を二人がかりで。

「え!? 何?」

さらに、足にも男子が取り憑く。四人がかりでがっしりと押さえられ、フェイトは全く身動きが取れなくなった。抵抗するが、四人も相手ではどうにもならない。

「ちんこが有れば男、無ければ女だ」

「えっへっへ……」

その場の男子が薄ら笑う。段々とフェイトは青ざめてきた。

「嫌、止めて……！ 助けて!!」

「誰も助けになんか来ねえよ!」

そんな懇願こんがんなど聞く筈がない。宮本は左手でスカートを捲る。フェイトの白くて細い足とパンツが顕あらわになる。よく見ると、パンツの下部が、うっすらと黄色く変色している。体育の時、ブルマに付いていた精液がパンツに染みて固まったからだったが、そこまで気づく余裕はない。

暴れるフェイトが地面に寝かされる。横になると、わざわざスカートを持つていなくても、落ちてこない。これで両手が使える。

「行くぞ!」

そう宮本が叫んでパンツに手を掛けると、足がすぼめさせられる。腕力よりも脚力の方が強いが、一人一本、体重を掛けて押さえられると敵わない。それに、元々足をすぼめる力は余り強くない。

「お願い! 何でもするから、止めて!」

(嫌! 助けて、なのは!)

フェイトの目から涙が滲しみんでくる。懇願も切羽詰せつばまるが、聞き入れられない。宮本は、太股まで一気にパンツを引き

下ろした。

「……っ!」

フェイトは顔を背ける。目と唇はギョッと閉じられ、抵抗のために悶もたえていた身体の動きは止まり、硬直し、小刻みに震えている。

「凄え! 女のちんこってこんななのか」

宮本は、視界の中心現れたフェイトの性器を凝視する。男の性器と違い、突起物や袋が無くすべすべで、一本の縦筋が有るのみだ。

「うっ…… うっ……」

フェイトの目からぼたぼたと大粒の涙がこぼれる。男子にパンツを降くだるされ、性器を見られるなんて、人生最大の屈辱くつじやくだ。

「おい、早くしろよ!」

「お、おう!」

宮本は暫くフェイトの性器に目を奪われていたが、仲間の声で我に返る。そして、足を押さええている男子と連携しながら、パンツを全部抜き去った。

「へえ、これが女のパンツか」

そう言って、宮本はフェイトのパンツのゴムを伸ばしたりして、しげしげと観察する。女子用のパンツは男子用のパンツと違い、伸縮性に富む。それ自体が男性用と違い面

白いし、まして女子用のパンツを触るのなんて初めてだ。

「お願い… 止めて… 返して…」

フェイトはその様子を直視できない。自分の下着が弄もてあそばれるのは、自分自身が弄もてあそばれる様に感じる。

「遊んでんなよ」

「分かった分かった」

宮本がフェイトの足首を持って、軽く左右に開く。パワードスーツが、小さな力を検知して実際に大きな力を出すように、宮本の動きに呼応して、足を押さえている男子が大きく開かせる。

フェイトの陰部が大きく頭あたまわになった。プレシアにも、リニスにも、アルフにも、こんなにまじまじと陰部を見られた事はない。

「嫌、嫌あ……」

「……うわあ、女のおそこって初めて見た……」

「畜生、俺達見えねえ！ 交代しろよ」

宮本がごくりと唾を呑む。足を押さえている二人もフェイトの陰部を覗き見る。背中から腕を押さえている二人は当然見えない。

九歳のフェイトの陰部は、まだ全然発達していないからある小陰唇のピラピラが、本当にあるか分からないくらい小さい。大陰唇の膨らみの間に即臍口が見える。そ

こはとても暗く、吸い込まれそうだ。

「この穴から小便が出てくるのかな？」

「ふっ、そんな訳ないでしょう。そこはペニスを入れるための穴よ」

「誰だ!？」

男子達は身構える。こんな所を見られたら自分達も身の破滅だ。

「アリサ! すずか!」

体育館の陰から現れたのはフェイトの親友、アリサとすずかだった。フェイトの表情がぱあっと明るくなる。

「アリサ、助けに来てくれたの!？」

「なんだ、アリサか」

「びつくりさせんなよ」

「……え?」

男子の言動がおかしい。動じないどころか安堵している。それに、アリサやすずかも、フェイトの状態を見ても驚いたり、怒ったり、心配したりしている様子はない。むしろ薄ら笑って、楽しんでるように見える。

アリサは、フンフンと鼻歌交じりにフェイトに近づいてきて、陰部を覗き込む。

「へえ、これがおまんこかあ。他人のをじっくりと見るのは初めてだわ」

「……」

「ああ、やっぱりフェイトちゃんのおまんこは綺麗ねえ。想像していた通りだわ♡ えい!」

「ひっ!」

状況が飲み込めず放心しているフェイトの陰部を、アリスとずすが観察する。さらにずすかは、フェイトのクリトリスを突く。フェイトの身体がビクツと痙攣する。

「な、何? どういう……事?」

「どういう事って、まだ分からない? 朝、机に精子が掛けられていたでしょ。あれ、あたし達がやったのよね」

「アリス、精子出せるの?」

「……良いボケね。出せるわけ無いじゃない。出したのは宮本よ。宮本、見せてやって」

「ここですか!」

「そうよ」

「でもな……」

「何今更恥ずかしくたってんのよ。あたし達は朝見たし、これからフェイトを犯すんなら、どのみち脱ぐでしょ」

「わかったよ」

フェイトは「犯す」と言う意味が分からなかったが、ろくでもない行為とだけは感じ取った。しかし、そう言う考えは次の瞬間吹き飛ぶ。宮本がズボンのチャックを開け、

勃起したペニスを取り出した。

「……!」

フェイトは、初めて見る男性器に頭の中が真っ白になる。その間に、宮本は自分のペニスを扱き始めた。

「宮本、そのペニスをフェイトの口に」

「お、おう」

宮本はフェイトの顔にペニスを近づける。フェイトの顔が引きつる。

「い、嫌! んんっ!」

「は、はあ……」

亀頭がフェイトの頬を押す。さらに操って、固く閉じられた唇を撫で回す。宮本達は小学生なので、エロビデオやエロ漫画を見る機会は限りなく少ない。しかし、男としての本能が、自分のペニスで女の子の顔を陵辱する喜びを湧き上がらせる。

フェイトも、尿の排泄器官としての嫌悪感と、男性器への本能的恐怖感から、必死にペニスの混入を阻止しようとする。

「ん、や、止め…… んっ!!」

「うおっ!」

言葉を発したのが行けなかった。僅かに開いた唇の隙間に、亀頭が割り込む。フェイトの温かく、柔らかい唇と唾

液が宮本の亀頭を包み、初めて味わう快感をもたらす。

「うおっ！ 気持ち良い！」

宮本はフェイトの頭を掴み、自分に押し付けようとする。しかし、唇はこじ開けたが、歯は閉じられたままだ。それ以上は進まない。

「しょうがないわね。手伝ってあげるわよ」

そう言っ、アリサはフェイトの鼻を摘んだ。フェイトは鼻呼吸が出来ず、仕方なく口を開ける。その瞬間、宮本のペニスさらに奥へとねじ込まれた。

「うげふっ！ げひゅ！ げふ……」

「うおっ！ 気持ちええ!!」

「言葉が貧困ね。もっと他の表現は出来ないの？」

フェイトは、咽せようにも太い棒が口の中にあるので、思うように咽せられない。宮本はその様なことはお構いなしに、フェイトの口の中を味わう。自分の腕と全く違う、舌の暖かさと柔らかさの感覚に酔っていた。

「あ、ああ……」

宮本が射精するのに時間は掛からなかった。まだオナニーによる感覚の鈍感化が無い状態での、初めての口内は強烈だった。朝出したにもかかわらず、どくどくとフェイトの喉奥に精液が注ぎ込まれる。そして、全ての精液が出尽くす前に、アリサは宮本の腰をフェイトから引き抜いた。止

まらない精液がフェイトの顔に飛び散る。

「んえっ！ げほ、げほ、苦……」

フェイトは口の中から白濁液を吐き出す。出して時間が経ち、さらさらになった朝の精液と違い、射出されたばかりで粘性のあるそれは、上手く口の中から出て行かず、フェイトの口元をどろりと伝わる。

宮本が恍惚の表情を浮かべている隣で、すずかがうずくまる。同じく顔がとろけ、赤い。両手で自分自身を抱き締めている。股間がむずむずするのか、足をもじもじと擦っている。

「ああ、フェイトちゃんに顔射……」

すずかは立って移動できず、這いながらフェイトに近づく。

「もつと良く見せて、フェイトちゃんの顔…… 白い精液に塗れたフェイトちゃんの綺麗な顔……」

そう言っ、すずかは両手でフェイトの顔を撫でる。フェイトは、今度はすずかの行動が理解できない。そんなことは構わず、すずかはフェイトの唇を奪う。そのまま舌まで差し込む。フェイトのファーストキスはなののだが、ファーストデープリキスはすずかのものとなった。

「ああ、フェイトちゃんの唇、やっぱり美味しい……」

そして、フェイトの手を取ると、自分の股間へと導き、

助けてくれたアリサが、虐めの真犯人だったなんて。

自分のパンツを触らせる。フェイトは、すずかのパンツがびしょびしょに濡れているのに驚いた。

「ほら、私こんなにぐしょぐしょ…… 知ってた？ 女の子って、好きな人の事を考えると濡れるのよ……」

スカートに隠れているので見えないが、溢れる愛液は、既にパンツでは堰き止めることが出来ずに、太股まで流れていた。

「すずか…… 一体どういう……」

「すずかはね、フェイトの事が好きなのよ。そしてあたしは、大嫌い……」

アリサの声が低く響く。顔も怒りの表情だ。アリサは、ポケットから一枚の写真を取り出す。

「その写真……」

「そ、良く撮れてるでしょう。あなたがなのはにキスした時の写真よ」

「まさか……!?!」

その写真には見覚えある。しかもそれは印画紙に焼き付けたL版で、カラーコピーしたような安っぽい、大きな物ではない。

「そ、あの時の写真よ。あれはあたしが貼ったの」

「そんな！」

フェイトは言葉を失った。親友で、虐められている時も

第4章

1

「山科先生、今日は」

「バニングスさん、月村さん、今日は」

「今から職員室ですか？」

「そうよ」

「あの、高町さんの様子はどうですか？」

「今は眠ってるわよ。お見舞いなら静かにね」

「はい」

アリサとすすかは保健室に向かう途中、保険の山科先生とすれ違つた。なのはの様子を簡単に訊いて、再び保健室に向かった。

なのはは朝から体調が良くなり、授業中熱を出して、保健室で寝込んでしまった。そのお見舞いだ。

「失礼します」

アリサ達はそつと保健室のドアを開けた。寝ていると

いうなのはを起こさない様にだ。そして、物音を立てずにベッドの方に近づく。

「!?」

声を上げそうになるのを思わず手で塞いだ。ベッドで寝ているなのはに對して、フェイトがキスをしている。

アリサの心の奥で、何かが煮えたぎってくる。あたしのなのはの唇が奪われた！ なのはとは小学校一年から三年間も付き合ひ、なのはへの感情に気づいてからも、ずっと想いを伏せてきた。それなのに、昨日今日現れた奴に唇を掠め取られた！ 許さない！

ふと隣のすすかを見ると、目を潤ませている。自分だけじゃない。その時、アリサに直感が閃いた。ポケットに入れているデジカメを取り出し、シャッターを切る。そして、フェイト達には声を掛けず、すすかの肩を抱いて保健室の外へ出た。

校舎の裏の階段に、アリサとすすかが腰を下ろしている。

「フェイトちゃん……」

「すすか、しっかりして。あたしも同じ気持ちだから」

アリサは、すすかの肩を抱いて慰める。

「なのはちゃんの事が好きなんだと思ってたけど、やっぱり

りそうだったのね……」

「そ、許せないわ。なのは皆のものなのに、抜け駆けなんて！」

思わず声を荒げる。誰も来ない場所なので少しぐらい大きな声でも気づかれない。

「アリサちゃんはなのはちゃんが好きなの？」

「へ？　ずずかとは違うの？」

てつきり、ずずかも自分と同じになのが好きで、フェイトに唇を奪われたのを見たから泣いているのかと思った。

「私は、フェイトちゃんが好きなの……」

「なんだ、そっちの方……」

少し面食らうと共に、好きな人が違って少し安心する。

これで親友すずかに遠慮無くなのはを独占できる。

「夜、フェイトちゃんの事を考えると、身体が火照って眠れないの。そして、大事な所に手をやって、フェイトちゃんの事を想像するの」

(え？　何!?)

あれれ、なんか変なことになってきたぞ。

「フェイトちゃんにキスをして、フェイトちゃんを脱がして、綺麗な身体を眺めるの。そして足を開かせて、フェイトちゃんの大事な所を嘗めるの。フェイトちゃんは悶えるわ。そこで指を一本入れるの。フェイトちゃんのまんこは

小さくて、一本でも痛がるのね。でも止めない。指を二本にして……」

「ちよつと、ずずか！」

「あ、ごめんなさい。つい……」

アリサは、ずずかの身体を揺さぶって妄想を止める。聞いているこつちが恥ずかしい。ずずかがこんなむつつりスケベだなんて知らなかった。

「駄目ね、私。フェイトちゃんの事を想つと止まらなくなるの。アリサちゃんは違うの？」

「あたしは、プラトニックよ！　そりゃ、キスくらいはしたいけど……」

「んふふ……」

焦って、照れて、縮こまるアリサが可愛いのか、ずずかが微笑む。なんか腹立たしいけど、ずずかはフェイトのことが好きで、しかもスっ気がありそうなので助かった。これで計画には何の支障も無くなった。

「ねえ、ずずか。良い考えがあるんだけど、乗らない？」

そうアリサは耳打ちする。

翌朝、フェイトがなのはにキスしている写真が廊下の掲示板に張り出された。

《フェイトちゃんってレズだったんだ》

《私、前から気に入らなかつたんだよね。男子にちやほやされてさ》

《そうそう。そんなに金髪が良いのかよ》

《ぶりっ子してるしね》

《なのはちゃん可哀想》

《寝込みを襲うなんて卑怯よね》

《あの娘、あたしに色目使ってたしね》

《うわっ！ キモイ！》

《ちえっ！ 女が好きなら見込みなしかよ》

《俺、ラブレター出したのに》

《うわ、だせえ！》

教室の中をメールが飛び交う。嫌悪、嫉^{ねた}み、落胆、拒絶、様々な負の感情が舞う。

第一段階成功。アリサがほくそ笑む。

翌日、午後の授業の後の休み時間。アリサはフェイトの後をついて行く。

(ちよろかったわね)

朝、フェイトの靴箱にゴミを入れ、机に落書きをしたのはアリサだ。しかし、昼休みに落書きをしたのはクラスの誰かだ。最初に悪戯を仕掛けるのは度胸^{どきょう}が、罪悪感の克服が要る。しかし、最初でなければ、それはさほど要らない。そう、だから最初の悪戯はアリサが行った。案の定誰かがそれに続いた。後は段々とエスカレートしていくのを待つだけである。勿論、自然とエスカレートしていくのを待つのも良い。しかし、それではゆっくりだし、自分でも幾らかは悪戯しないと楽しくない。そこで、アリサは次の悪戯を仕掛けようとしていた。

フェイトがトイレの個室に入り、用を足し始めたのを確認すると、アリサは用具室からモップを取り出す。そして、用意していた紐でモップの柄とドアを固定する。これでフェイトは個室から出ることが出来なくなった。

アリサはフェイトが気づかないうちに、そして休み時間の中に教室に戻る。フェイトの席をちらつと見ると、誰かが椅子の上に画鋏を置いてある。アリサは表情を表に出さないよう気をつけながら、ほくそ笑む。

3

昼休み、アリサとすずかは靴箱に女子が何人か集まっているのに気づいた。それもフェイトの靴箱の辺りだ。

「ちよつと、あんたら何やってるの!？」

女子達が驚いて振り向く。手にマジックと、フェイトの靴を持っている。

「何よ、フェイトの肩持つの?」

「靴の外側に落書きすると、家の人に簡単にバレちゃうじゃない。やるなら内側にしなきゃ。それか上履きね。それも先生にバレないように、内側にね」

女子達はきょとんとしてアリサを見る。

「アリサ、フェイトの味方じゃないの?」

「勘違いしないで。なのはの味方よ。フェイトには怒ってるんだから」

「でも、フェイトとは話してたじゃない」

「ふ、それは作戦よ作戦。虐められている中で、唯一の理解者だと思っていたあたし達から裏切られる。どんな気持ちでしょうね」

「……」

女子達はあっけに取られた。

「あなた達、やるわね」

「ふっふっふ、おぬしも悪よのう」

ノリが良いのか、時代劇のお決まりの科白せしびが飛び出す。アリサ達は、靴への悪戯はその娘達に任せて、その場を離れる。

「私達もフェイトも虐めてるって、バラしちゃって良いの?」
さつきは口を挟まないでいたすずかが、アリサに意図を確認する。

「これも作戦よ、作戦」

「作戦?」

「これから、虐めのレベルを上げるのには、バレないようにする事は無理、いえ、クラスの皆に協力を仰ぐ必要があるわ」

「それで」

「あたし達がいきなり強力な悪戯を行おうとしても、皆は協力してくれない。それにフェイトの理解者の振りもしている分、逆にあたし達が虐められる。だから、あたし達はクラスの味方である事を、おんびん穩便に知らしめないといけないのよ」

「成る程ね」

「本番はこれからよ」

「共犯だよ！ だって、私もフェイトちゃんのこと好きだもん！」

「……」

「ありがとう。でも……」

「これ、使って」

「駄目だよ、これじゃあ……」

「うっん。平気だよ、これくらい。せめてもの罪滅ぼしさせて」

「ありがとう、なのは……」

ぎゅっ！

物陰からフェイトとなのはの様子を盗み見していたアリスが、拳を握る。

（なのはもフェイトのことが好き!? それに傘を貸して貰うなんて！ 許さない!!）

「やった？」

「やったやった」

「フェイトの奴『あつぷあつぷ』って言うてんの。人間って溺れると本当に『あつぷ』って言うんだね」

「きゃはは！」

「顔もぐちゃぐちゃでさあ、様あ見ろって感じ」

「そのまま幽霊映画に出れるよね！」

「こないだ多城君に色目使ってたんだよね。あの顔写メしときゃ良かった」

更衣室で、アリスはフェイトを溺れさせた女子達からの戦果を訊く。女子達は意気揚々と語る。

（ふ、いい気味よ。なのはから告白されて、傘借りて、風邪引かせるんだもん）

今回、フェイトを溺れさせようと提案したのはアリスだった。アリスとすずかもフェイトを虐めていること、今はその事をフェイトとなのはに悟らせないようにしている作戦は、既にクラス中に浸透している。

「アリスもやれば良かったのに」

「あたしが加わるとバレちゃうかもしれないでしょ。もっと追い込んでからでないか」

「え、まだやるの？」

「そ、例えば……」

アリスはフェイトのロッカーを開け、荷物を探る。そして、フェイトのパンツを取り出した。

「分かった、フェイトのパンツを隠すんだ」

「うわ、えげつな」

「違うわ」

「何？ 破くやぶの？ それとも落書き？」

「それも違う。見てて」

そうして、アリサはフェイトのパンツを廊下に張り出した。

5

翌日、アリサとすずかはかなり早く登校する。少し後に、数人の男子が登校してきた。

「遅い！ 何やってんのよ！」

「約束の時間には合ってたんだろ。大体何でこんな朝早く呼び出すんだよ」

「一晩経ったら乾いちゃうでしょ」

「何が？」

「精子が」

「は!？」

男子はきよとんとする。

「精子をフェイトの机に掛けてやるのよ」

「だから、精子って何だよ」

(……子供ガキ)

男子が子供ガキだとは思っていたけど、ここまで子供ガキだとは

思ってたなかった。

「あ、俺知ってる。卵子とくっついて赤ちゃんになるんだよ」

「へえ」

(少しはましなのいるじゃない)

「お前良く知ってたな」

「テレビでやってた」

「で、どうすんだよ？」

「さあ？」

(は……)

やっぱり子供ガキね。アリサは呆れる。

「ま、それでね、その精子をフェイトの机に掛けてやるのよ」

「それが今度の悪戯のネタか？」

「そうよ」

「でも、どうすんだ？」

「おい、精子ってどんなんだ？」

アリサは段タイライラしてきた。このままでは他の児童もどんどん登校してくる。そうすると色々面倒だ。

「あゝもう！ 焦じれたい!! オナニーすれば出てくるでしょ!!」

「オナニーって何だ？」

「くっつ!」

「駄目よ、アリサちゃん。そんな風に怒っちゃ」

「さすが、アリサの肩に手を置いて沈める。そして、優しく男子に語りかける。」

「じゃあ、私が精子の出し方教えるわね。宮本君」

「ああ」

「ズボンとパンツ脱いで」

「はあ!？」

再び男子が呆気に取られる。

「何でパンツ脱がなきゃいけないんだよ!？」

「そおねえ、無報酬でこんな事頼むなんて虫がよ過ぎよね

……」

そう言つて、すずかは自分のスカートを掴むと、そろそろと持ち上げ始めた。

「おおっ!？」

「何すんだよ!？」

男子が動揺する。女子のパンツを見たくない男子はいない。しかし、いざ女子が自分からスカートを上げるのに対して、平然としていられる訳がない。

「ちよつと、すずか何すんのよ」

「任せて」

すずかがスカートを上げ切る。すずかの細くて白い足と、

可愛らしいパンツが男子の前に顕わになる。

「おおっ!？」

男子が声を上げる。全員の股間が膨らんでいるのがはっきりと分かる。女子の前で勃起している姿を晒すのは抵抗があるのか、前屈みになっているのもいる。

「宮本君、こっちに来て」

「ああ……」

宮本がすずかに近づくと、すずかは宮本の股間に手を伸ばした。

「うわっ!? 何すんだよ!!」

いきなり女子に股間を触られて驚かない男子はいない。宮本は驚きと恥ずかしさで逃げようとするが、すずかは宮本に身体毎密着させて、阻止する。

「恥ずかしがらないで……」

すずかは宮本の股間をさすり続ける。宮本の、いや、そこにいる全員の顔が真っ赤だ。

「さ、こっちに来て……」

すずかは程々で止めると、宮本はフェイトの机の後ろに誘導した。そして、宮本のズボンのチャックを開け、ブリーフを探ると、宮本のペニスを取り出した。小学三年生のペニスは勃起していても小さいが、勢いよくそそり立ってい

る。宮本は、今度は抵抗しない。

「へえ、ペニスって、こんな何だ」

「ぐくり。」

アリサは唾を呑み込む。すずかもアリサも、同年代の男子のペニスを見るのは初めてだ。興味津々だが、あまり眺めている時間はない。

すずかは宮本の後ろに回り、宮本のペニスを掴むと、扱とき始めた。

「うあつ!？」

宮本が思わず声を上げる。腰がビクビクと震える。すずかは、あまり腰が引かないように身体で防ぐ。

「うわあつ!!」

宮本が一際大きな声を上げた時、すずかは、ペニスをフェイトの机の開口部に向けた。

びゅびゅびゅっ! びゅっ! びゅっ!

ペニスの先端から白い液体が勢いよく飛び出し、フェイトの机に吸い込まれる。精通の大量の精液が、フェイトの机の中をぐちよぐちよにする。

「はあ、はあ、何だ? これ?」

「これが精子よ」

そう言って、すずかは机の中の精液を少しだけ掬すくう。

「しょんべんじゃねえの?」

「ちんこから出たもんな」

「違っわ。おしっこなら、こんなに白くて、どろどろじゃないでしょ」

周りの男子に、アリサが答える。アリサも精液を見るのは初めてだが、堂々としている。

「それよりも、なんだ、この感覚。なんかズビズビって……」

「気持ち良いでしょう。でも、もっと気持ち良くなれるわよ」
そう言って、すずかは宮本の前にしゃがむと、ペニスを口にくわえた。

「うおおっ!」

宮本がまた叫ぶ。射精後で敏感になっている亀頭への刺激に、腰が痙攣する。再びペニスが勃起した所で、口から離す。

「今のは口だったけど、女の子の別の所だと、もっと気持ちが良いのよ」

「今以上に気持ちが良いのか?」

「そうよ」

「それ、どこだ?」

「それは、フェイトの身体で教えてあげる」

アリサとすずかは、今日一日の作戦の詳細を伝えた。

第5章

1

「アリサ……友達だと思ってたのに……助けてくれたのは嘘だったの？」

「その友達からなのは盗ったのは誰？ この泥棒猫！」
そう言つて、アリサは鞆から鏡を取り出した。その鏡を、フェイトの股間に近づける。

「フェイト、自分のまんこって見たことある？ 無いわよね、ほら」

そう言つて、フェイトに自分の膣穴を見せる。

「小さいでしょ」

アリサは、フェイトの膣穴に指を当てる。

「痛い！」

今までどんな異物も入った事のない膣穴は、アリサの細い指でさえ拒んだ。

「痛いでしょ。ここに、こんな物入ると思う？」

今度は、リコーダーを取り出した。指なんかよりも全然太い。それだけでなく、複雑な凹凸が抵抗ありそうだ。

「ひっ!？」

フェイトは本能的に、それが入れられる事への恐怖を感じた。自分の身体の中に異物を入れられる。人間は本能的にそれを拒否する。しかもアリサの指だけでも激しい痛みを感じたのだ。リコーダーの様に太くてごっごつした物を入れられたら、どうなるか分からない。

アリサはそつとリコーダーの口をフェイトの膣口に当てる。

「や、止めて！」

「止めて欲しい？」

フェイトはこくりと頷く。アリサは「にやっ」と笑つと、リコーダーを離れた。フェイトはほっとしたが、アリサはそんなに甘くない。

「じゃあ、これ呑んでくれる？」

アリサは鞆からコップと小箱を取り出す。

「こないだ読んだ漫画にね、ミミズジュースってのがあったのよ……」

アリサは小箱を開いた。

「でもミミズって最近いないじゃない。それで、釣具店に行ったら良いの売ってたの」

そして小箱の中をフェイトに見せる。

「これ、ゴカイって言うんだって」

「ひいっ!!」

フェイトの顔が恐怖で引き攣る。うねうねと動く細い体、細かな沢山の節と足。ミミズの方がまだましだ。

アリサはコップにゴカイを入れると、水筒から水を注ぐ。そして、フェイトの前に差し出す。水の中をゴカイがゆらゆらと泳いでいる。

「さ、吞んで」

フェイトがふるふると首を振る。顔は恐怖で蒼白だ。

「呑みなさい！ リコーダーまんこに突っ込むわよ！」

そう叫んで、コップをフェイトの口にくつつける。アリサはそれでも口を開かないフェイトに業を煮やし、鼻を摘む。フェイトが息苦しさに耐えられなくなり、口を開いた所にゴカイジュースを流し込んだ。

「うげえっ!! げふっ！ げふっ！」

ゴカイジュースは一旦胃の中に納まったものの、その嫌悪感から直ぐに吐き出される。地面でゴカイがうねうねと動いている。

「あら、吐いちゃったんだ。そのまま吞んでれば勘弁してあげたのに……」

アリサが冷淡に告げる。しかし、本当かどうか疑わしい。

「じゃ……」

アリサはリコーダーを持つと、先端をフェイトの膣口に付ける。

「フェイトの処女頂きま〜す♡」

リコーダーの先端部は細くなっているので、辛うじてフェイトの処女膜は傷付かなかった。しかし、直ぐに太くなる。アリサがリコーダーを押し込むにしたがい、大きくなる直径がフェイトの処女膜を裂く。

「痛い!! 痛い！ 痛い！ 止めてー！」

「止めて」と言われて止める者はいない。アリサはさらに押し込む。リコーダーの凹凸が、処女膜の裂傷をさらに傷付ける。未踏の固く閉じられた膣穴が無理やりこじ開けら、潤滑油が全く無い状態の膣壁に、リコーダーの凹凸が擦り付けられる。

「ああ、フェイトちゃんを犯してる…… フェイトちゃんの処女膜を破ってる……」

すずかも恍惚も続いている。リコーダーを、自分には無いペニスになぞらえ、あたかも自分がフェイトを犯しているような感覚を味わっている。その感情移入は、アリサがリコーダーを動かすので十分で、自分で動かす必要はないようだ。むしろリコーダーを動かすのに気を取られず、存分にフェイトの顔を撫でている。

「ぎゃっ!」

リコーダーの先端が子宮口に当たり、これ以上進めなくなった所で、アリサは動きを止めた。

「痛い… 抜い…て……」

フェイトが涙をポロポロと流しながら懇願する。膣口から破瓜の血液がちろちろと流れている。

「駄目よ、フェイト。これからよ」

アリサは少しだけリコーダーを後退させると、今度は勢いを付けて突いた。

「ぎゃあっ!!」

フェイトの体が大きく跳ね、目と口が限界まで開く。アリサは構わずフェイトを突きまくる。細いリコーダーの先端が子宮口を傷付ける。膣口からは、先程とは比較にならない程の大量の血液が溢れ出る。

「どうおっ? 子供産めなくなっちゃんかも知れないけど、良いよねえ? 女の子が好きなら、子供なんて産めなくたって良いよねえ!?!」

アリサは悪魔のような形相でフェイトを痛め続ける。それは、フェイトが白眼を剥いて気絶するまで続いた。

引き抜いたリコーダーから、フェイトの血がポタポタと

滴り落ちている。

「はあ、はあ……」

周囲に音は、息が上がったアリサの呼吸音しかしない。アリサは宮本の方を向く。

「さ、もう良いわよ。フェイトを犯しなさい」

男子達は蒼白した顔でお互いの顔を見る。

「じよ、冗談じゃない。俺は降りるぞ」

「や、ヤベエよ。これは」

男子達はフェイトを放すと、その場から逃げようとする。

「待ちなさい。言うこと聞かないと、良いの?」

そう言つて、アリサはポケットからデジカメを取り出した。

「これには、あんた達がフェイトを襲っている様子がバツチリ入つていわ。これを公表されなくなったら……」

「か、返せ!」

男子がアリサからデジカメを取り上げようとするが、アリサはひらりとかわした。

「別にこのデジカメ上げても良いけど…… 中のデータは無線LANでパソコンに転送済よ」

「なっ!?!」

「勿論、あたしが解除コードを打ち込まないと、自動的に

インターネットにはばら蒔かれる仕組みになってるわ」

「くっ！」

男子達が悔しがる。

「さあ、今からペニスをぶち込んで、たっぷり精子をフェイトに注ぎ込みなさい!!」

アリサが高らかに叫ぶ。その時、その場に人影が現れた。

「フェイトちゃん……」

皆が声のした方に振り向くと、なのはが呆然とその場に立っていた。

「これは一体… どう言つこと?」

「なのは、どうしてここに?」

「そんなことより、アリサちゃん…… そのリコーダーは何? どうしてフェイトちゃんが血を流してるの……?」

「……」

「答えて!」

アリサは観念して語り出す。

「そ、あたしがやったのよ。フェイトへの虐めも、全部あたし」

「どうして? 私達親友でしょ?」

「その親友の唇を無理やり奪ったのは誰?」

「そ、それは……」

「フェイトでしょ。だからなのはの代わりにお仕置きしてあげたの」

「それに、私そんなの望んでない! やり過ぎだよ! こんなもの!」

「いいえ! まだ全然足りないわ!! 宮本! さっさと犯つて!」

「で、でも……」

アリサは宮本に再度命令するが、犯行を見られた事で躊躇する。

「インターネットにはばら蒔かれたいの!」

「くそ!」

男子達がフェイトに近づこうとした時、なのはが小さく呟く。

「バインド……」

男子達の体に光るわっかが絡み付き、倒れる。

「何だ、これ?」

男子達もアリサも、初めて見る魔法に混乱する。

(レイジングハート、探索魔法)

《All right my master》

レイジングハートがアリサのデジカメと無線LANで繋

がっているパソコンを探す。

《Finding》

「う、ううん……」

探索は終了した。それと同時に、フェイトの意識が戻り始めた。

「デイバインシューター」

なのはが呟くと、二つの光球が飛び出す。一つはアリサが持つデジカメへ、もう一つは校舎の中に入り、デジカメのデータが納められているパソコンへと向かう。そして、光球がアリサのデジカメを破壊したのを見て、フェイトが正気に戻った。

「なのは、駄目！」

「な、何が起こったの？」

アリサがデジカメが存在した筈の空間を見て、呆然となる。

「なのは、駄目だよ、魔法使っちゃ」

「魔法？」

（何？ それ？）

勿論アリサも魔法という言葉は知っている。しかし、それはゲームやアニメなんかのファンタジーの物だ。

「構わないよフェイトちゃん……」

「でも、この世界には居られなくなっちゃう……」

「フェイトちゃんと一緒なら、どこでだって良いよ」

そう微笑^{ほほえ}んで、なのははアリサと男子にデイバインシューターを当て、気絶させた。

「立てる？」

なのはは、フェイトの肩を持ち、ゆっくりと立たせる。

「待って、私のフェイトちゃんを連れて行かないで……」

さすがが縋^{すが}り付くが、デイバインシューターを当てて気絶させ、フェイトを連れてその場から立ち去った。

2

「着いたよ、フェイトちゃん」

高町家に、フェイトを抱えたなのはが降り立つ。普段はバスで帰るが、消耗しきったフェイトを早く連れ帰りたかった。誰かに見られる危険性もあったが、もっとうでも良い。フラフラとしているフェイトを肩で担ぎながら、玄関のドアを開ける。そのまま脱衣所に連れて行き、「待ってて」と言っ、自分の部屋から着替えを持って来た。

フェイトの服を脱がすと、下着を洗濯機に放り込み、スリッパを入れる。制服は洗面器に石鹸水を入れて漬け込む。制服も下着も、血糊で汚れていたからだ。そのまま着ている訳には勿論いかないし、早く洗わないと跡が残ってしまう。

「フェイトちゃん、身体、綺麗にするよ」

裸にしたフェイトをお風呂場に連れて行き、シャワーを掛ける。血で汚れたフェイトを綺麗にしなければならぬ。しかし、傷口が染みないように注意して。

シャワーを頭に掛けると、さーっと、沢山の髪の毛が抜けて行った。

「フェイトちゃん、辛かったんだね……」

なのはは、フェイトが虐められて来た日々、親友から裏切られ、大事な所を痛め付けられたショックを想って涙する。

「私のなんだけど、サイズ合うかな？」

「大丈夫……」

洗濯中の制服と下着に替わって、なのははのパジャマと下着を貸す。パンツは男子に盗られたままだが、その事を思い出せないようにする。

フェイトの方が、少しだけなのはよりも身体が大きい。でもちゃんと着ることができた。

なのははフェイトを部屋まで案内し、ベッドに寝かすと、再び「待ってて」と言って、出ていった。

フェイトは、なのはのベッドでぼーっと天井を眺める。

ベッドは、ほのかになのはの匂いがする。心地好い。

(……駄目だ)

なのはは恋愛感情を抱いたのが、今回の事件の発端だ。やっぱり、女の子が女の子を好きになってはいけなかったんだ。

フェイトは布団を頭から被る。そうしていると、なのはが戻って来た。小さな壺と、古めかしい書物を持って。

「お待たせ。これ、家に伝わる秘伝の薬と、使い方を書いた古文書。これ塗ると、どんな傷でも直ぐ治るんだよ」

「……」

フェイトは、なのはの袖をギュッと握る。

「ごめん、なのは。私の所為で、なのはにまで迷惑掛けて……」

「何言ってるの？ 迷惑だなんて全然思っていないよ」

「でも、みんなの前で魔法使ったら、もうこっちの世界には居られないよ」

なのははフェイトに覆い被さり、抱き締める。

「気にしなくて良いよ。いつかは地球を離れて、ミッドチルダで暮らさなきゃいけないから。それが早まっただけだよ」

「なのは…… ありがとう…… 大好き……」

「私もだよ、フェイトちゃん……」

なのはは少しだけフェイトから離れると、また近づく。

さつき顔はフェイトの右肩に持つて行ったが、今度は正面に。そして、フェイトにキスをする。

「なの…は？」

目をぱちくりするフェイトに、なののは頬を赤らめ、笑顔で答える。

「フェイトちゃんと離れていて、とつても辛かった。風邪をひいて寝込んでいた時も、『早くフェイトちゃんに逢いたい』ってばかり思ってた。そして、フェイトちゃんから『助けて』って念話が来た時分かったの。私の『好き』もフェイトちゃんの『好き』と同じなんだって」

「なのは」

フェイトの顔がぱあっと明るくなる。なののはもう一度キスをした。

「さ、早く薬を塗ろう。その方が早く治るし」

そう言って、なののは古文書を捲く。

「なのは、そんな古い本読めるんだ。凄いね」

「だって、隣に普通の言葉書いてあるもん。ほら」

そう言って、フェイトに古文書の中身を見せる。ミニミズが這ったような文字の隣に、楷書で現代語訳が書いてある。近年の先祖の誰かが書き加えたものだろう。どちらにして

も、フェイトはまだ漢字は上手く読めないの、なんて書いてあるかは分からない。

「えっと、有った有った。『膺を突かれたる場合、突かれた者の愛液と混ぜ、膺の奥に十分に塗り込む』」

「そんな細かい症例まで書いてあるの!？」

フェイトは恥ずかしさに赤くなりながら訊く。

「うん。女問者、あ、女スパイの事ね。の拷問によく行われたらしいよ」

「……なののはご先祖様って、凄いんだね……」

女スパイとか、拷問とか、一体どういう状況だろう？ そんなにハードな仕事をしていたご先祖様なんだろう？

「他にも、磔、水責め、石抱き、笞打……」

「鞭なら、私もよく打たていたな……」

(しまったー!!)

「それで、愛液の出し方とかが何ページも書いてある」

なののは引き攣りながら、話題を変える。

「そんなに難しいの？」

「ううん、ほとんどHな本……」

なののはが複雑な顔をする。

「……なののはご先祖様って……」

「言わないで」

フェイトも、これ以上追求しないようにした。

「それで、愛液ってどうやって出すの？　と言っか、愛液って何？」

「えっと、Hな事をしたら膣から出てくる汁、液体……　みたい……」

「ええっ!？」

なのはが、恥ずかしさでもじもじしながら答える。その答えを聞いて、フェイトも驚く。「Hな事したら」と言うこと、さらに、膣から液体が出てくるなんて。

「Hな事って、どういう……事？」

「触ったり、とか……　嘗めたり、とか……　それに、Hな事考えた時とか……」

「そうすると、膣から液体が出てくるの？　信じられない」
なのはが、さらに真っ赤になりながら答える。

そう言えば、すずかのパンツも濡れていた。あれが愛液だったのだろうか？

「本当、だよ。だって、お兄ちゃんと忍さんがHな事してるのを見た時、私の膣からも、その、液体が出てきたもん……」

フェイトがあんぐりと口を開ける。なのはは顔を上げられない。

「そ、それに、今だって……!」

なのはが、そろそろと自分のスカートを掴んで持ち上げ

た。薄緑色の可愛いパンツが現れる。その股間の部分が、濡れて、色が濃くなっていた。

フェイトはそれを見て息を呑む。女性の人体の不思議を目にし、しかもそれをなのはで確認し、素直に驚く。自分にも、ああ言う液体が出てくるんだろうか？

「だから、フェイトちゃんからも出てくるよ、液体が……」
今自分の膣からも液体が出てきたら、なのはみたいにパンツが濡れるだろうか。なのはから借りているパンツが……
なのはから借りているパンツ？

(今、私なのはのパンツ穿いてる!?)

フェイトは、ようやく現在の自分の状態に気づいた。借りた時はショックで朦朧もうちやうとしていて気づかなかったが、今自分なのはが普段身に付けているパンツを穿いている。なのはの大事な部分が常に触れている布を通して、自分の大事な部分が間接的に触れ合っている。その事に気づくと、恥ずかしくもあり、嬉しくもあり、何より興奮して、胸がドキドキしてきた。

「あ……」

股間が熱くなる。それだけでなく、何か「じわっ」とした感触がある。

「どうしたの？」

「なんか、変……　今なのはのパンツ穿いてるって思った

ら……」

「フェイトちゃん、ズボン脱がすよ」

フェイトがこくりと頷くのを見て、なのははパジャマのズボンを下ろす。そして、少し足を開かせると、膣口がある筈の場所の布が、小さく濡れている。

「フェイトちゃん、濡れてるよ。少しだけど」

「そ、そう？ あ、ごめん、なのははのパンツなのに、汚して……」

「ううん、フェイトちゃんの愛液だもん。全然構わないよ。それに安心して、これで薬が作れるよ」

そう言っ、なのははパンツの上からフェイトの膨らみに触れた。

「あー！」

フェイトの身体が少しビクつく。なのははフェイトのクレバスに沿って、指をゆっくりと、軽く、そして何度も這わせる。決して強くはないが、触れるか触れないかの微妙な刺激が、フェイトの身体を痙攣させる。

次に、上下にまんべんなく動かしていた指を、微妙に引っかかる所で止める。そこを指の腹で撫でると、コリコリとした突起があるのが分かる。

「ああっ!？」

フェイトの身体がさらに跳ねる。膣口の染みが大きく

なる。

「これ、何？ この感覚……？」

『「気持ちいい」って事なんだと思うよ」

（『「気持ちいい」？ ちんこを撫でられるのが？」

「このままだとパンツに吸い込まれて、薬が作れないから脱がすよ。良いね？」

「う、うん……」

なのはは、パンツに手を掛け、そろそろと下ろす。なのはの前に、フェイトのすべすべのまんこが現れる。ここまでは、一緒にお風呂に入った時などに見た。そして、脱がすために一旦閉じさせていた足を再び開かせる。

これからは、まだ見たことない領域だ。フェイトが男子とアリサに襲われていた時にも見えてはいたが、離れていたので局部がどうなっていたかは分からない。単に大事な所から血が溢れていたのが見えただけだ。

フェイトは、目を瞑って羞恥心に耐える。幾ら大好きなのはは相手だとは言っても、自分の局部をまじまじと見られる事は恥ずかしい。

「へえ、膣ってこんなになってるんだ。本当に液体が出てるんだね」

「そんな…… 言わないで、恥ずかしい」

なのはは、フェイトの大陰唇に手を当て、横に開いて覗

き込む。

「あ……」

膣がピンクと言うより赤い。膣壁自体充血していたし、血糊が残っている。それに、膣口をぐるりと囲んでいる巖ひだに、無数に裂けた痕あとがある。出血は止まっていたが、とても痛々しい。

(フェイトちゃん、ごめん)

なのはは、興味本位でフェイトの膣口を覗き見した事を反省し、本来の目的である、愛液の採取作業に取りかかる。

「まだ足りないから、もっと出させてあげる」

なのはは、膣口の少し上、小陰唇の合わせ目にある突起を、舌の先端でちよろっと嘗める。

「ああっ！」

フェイトの身体がまた跳ねた。なのはは舌の動きを止めず、フェイトのクリトリスを刺激し続ける。フェイトが堪たまらず身体をくねらせるが、足をしっかりと押さえているので、身体がよじれるだけで。

「そろそろ良いかな？」

なのはは、クリトリスから舌を離すと薬の壺の蓋を取り、逆さにしてフェイトの膣口の下に当てた。そして、今度は指でクリトリスを刺激する。フェイトの膣口から流れ出た愛液が、薬の蓋に溜たまっていく。十分に溜まった所で、壺

の中に入っている薬と混ぜ、念入りに練り込んだ。

「薬が出来たよ、フェイトちゃん。今から、塗るね」

出来た薬をちらりとフェイトに見せると、なのはは薬を指に付けた。そして、ゆっくりと膣口に近づける。

小さい。

とても小さい。こんな小さな穴に、無理矢理リコーダーを突っ込まれたのだ。なのはは、フェイトの苦しみを想って、胸が張り裂けそうになる。

「痛っ！」

指を膣口に付けた瞬間、フェイトが悲鳴を上げる。

「痛かった？ ごめん」

「う、ううん。平気……」

なのはは、指を第一関節まで入れる。

「あつツ！」

「フェイトちゃん、痛い？ でも、我慢して！ ちゃんと薬塗らないと……」

なのはは一旦指を引き抜くと、薬を付け直して、再び指を入れる。そして、ぐりぐりと右に左に回転させながら、指を奥まで入れていく。一度太いリコーダーを入れられ、愛液も十分に出ているとは言え、元が小さく、固く締まった膣を進むのは容易ではない。

フェイトは苦痛に喘あえぐ。何もなくとも、小さな膣をこじ

開けられるだけで痛みが生じるのに、アリサから痛めつけられた際の恐怖が膣の筋肉を強張らせ、痛みを増させていた。さらに、リコーダーによる裂傷が再び開く。傷口に指が当たる。薬が擦り込まれて染みる。だが、フェイトはなのはが自分のためを思っている事なので、必死に耐える。

「ぎゃあっ!!」

しかし、指が子宮口に辿り着いた所で、限界を超えてしまった。リコーダーの鋭い先端で激しく突かれた子宮口へのダメージは、想像以上だった。

3

「嫌…！ 怖い…！ 助けて！ 助けてなのは!!」

フェイトは自分の叫び声で目が覚める。全身汗だくで、息も荒い。

「大丈夫？ フェイトちゃん？」

「なの…は？」

なのはが心配して覗き込む。そうだ、ここはなのはの部屋だ。

「安心して。ここにはフェイトちゃんを虐める人はいないよ……」

そう言っつて、なのははフェイトを抱き締めた。柔らかい。

そして、良い匂い。とても安心でき、心地良い。

「う、うん……」

フェイトは、息を整える。

「私、気を失ったんだ… ごめん。なのはが私のためにしてくれたのに……」

「ううん、むしろ気を失ってた方が、フェイトちゃんが痛くなくて良かったよ。安心して、ちゃんと薬は塗ったから」

「ありがとう」

フェイトは、優しい言葉と、薬を塗ってくれた事に感謝する。

「私も、何かなのはにしてあげられたら良いんだけど……」

「じゃあ、私も気持ち良くして」

「え？」

「愛液を出そうとしてる時、気持ち良かったでしょ」

「う、うん」

「なんだか分からないけど、少し恥ずかしい。」

「それを、私にもして欲しいの」

そう言っつて、なのははフェイトの手を掴むと、自分の股間に導く。

じゅっ……

なのはのパンツは、じとじとに濡れていた。少し押すと、愛液がパンツの布から滲み出してくる。

「こ、これ!？」

「お願い……」

なのはは真っ直ぐにフェイトの目を見る。吸い込まれそうだ。

「うん、私で良かったら」

「ありがとう、フェイトちゃん♡」

なのはは、フェイトに抱きついてキスをする。

「ん…ふ…んん……」

キスしている間、フェイトは自分がなのははからされた事を思い出す。それだけで恥ずかしくなるが、同じ事をなのははにしなければならぬ。フェイトは、股間に押し当てさせられている指を少し曲げた。

びくっ。

なのはの身体が震える。フェイトは続けて指を曲げたりしながら、なのはのクレバスを布越しになぞる。なのはの身体がビクビクと震える。

「ぶはっ!」

唇を離すと、二人とも大きく息を吸った。特になのはは、喘ぐのも我慢していた。

「フェイトちゃん、気持ち良いよ……」

「そう、こんな感じで良いの?」

「良い…よ……」

フェイトはさらになのはの股間をいじる。動きが速く、強くなっていくが、布越しなのでほどよい刺激に緩和される。愛液が止めどなく溢れ、フェイトの手まで濡れてくる。

「なのは、凄い。パンツくしょくしょ」

「うん、もう、脱ぐね」

なのははパンツを脱ぐと、目の前に持って来る。

「うわ、凄い…… びしょびしょだ」

何もなくても雫が滴り落ちそうなパンツを、ギュッと握りしめる。すると、じわ〜と愛液が絞り出され、ぽたぽたと落ちる。二人はそれを見るとくすりと笑った。

「じゃあ、フェイトちゃん、お願い」

なのははベッドに寝ると、少し足を開く。フェイトはそれを、マンコを直接刺激して欲しいサインと受け取り、身体を下げた。フェイトの顔が下半身に近づくと、なのはは大きく足を広げた。

フェイトはなのはの性器を覗き込む。女性器は、鏡越しに自分のものを見せられた事があるだけだ。他人の女性器をまじまじと見るのももちろん初めてだ。

細い楕円形の穴が開いていて、その奥は暗いが僅かにピンク色をしている。その両隣は大陰唇が豊かに盛り上がり、その間には小さな突起がっんと立っている。

フェイトは、自分がされたように、そっつと舌を突起に

近づけて、ちよろりと嘗める。

「あんっ♡」

なのはが可愛い悲鳴を上げ、身体が大きく跳ねる。

「なのは、大丈夫!?」

「なんか、電気が走ったみたいだった…… 続けて……」

「うん」

フェイトは再び舌でクリトリスを嘗める。

「はうっっ!」

なのはは身体を反らし、太股を閉じる。その間にフェイトの頭が挟まる。

「続け……て……」

ぴちゃぴちゃと嫌らしい音が響く。なのはは身体をくねらせ、フェイトの頭を挟んだり、離したりする。フェイトも慣れてくると、単純に嘗めるだけでなく、舌先でコロコロとクリトリスを転がしたり、表皮を剥いたりする。

「ほ、他の所も……」

フェイトはその願いを聞き入れ、舌を下げ、膣口を嘗める。なのはがそれまでと違った喘ぎ声を上げる。舌をすばめて膣の中に入れ、なぞる。

女性の性感帯は全身。内股や胸、腹、嘗めて快感を与えられる場所は幾らでもあるのだが、経験の浅いフェイトには未だ分からない。フェイトは執拗に女性器を愛撫し続けた。

「ねえ、指、入れてみて……」

「え? でも、それじゃあ痛いよ……」

「優しくすれば、気持ち良いものなの。セックスだったら、ペニス入れて気持ち良いんだから……」

「そうなんだ」

フェイトは、自分の体験はやはり不幸なものだったのだと想う。

「もし痛くても、フェイトちゃんになら良いよ。フェイトちゃんだけが痛いのが不公平だし。一緒に想いを共有したいの……」

「なのは」

なのはの言葉が嬉しい。優しい言葉に、涙がこぼれる。

フェイトは、人差し指を膣口に当てる。なのはの膣口は小さく、指の腹だけですっぽり隠れてしまう。そこに指を入れるのにも勇気がいる。フェイトは覚悟を決めて、指を進めた。

ぬちゅっ……!

第一関節が入る。ここまでは何の苦もなく入る。さらに第二関節まで進める。なのはの膣内は十分に濡れていたが、フェイトの指は乾いたまま。外側の皮膚が引っ張られる。

「痛!」

「あ、ごめん。大丈夫?」

フェイトは慌てて指を引っ込める。

「大丈夫、少し引っ張っただけ。続けて」

「うん」

ここで止めようとしても、なのはは納得しないだろう。フェイトは再び指を進める。今度は、さっきよりもすんなりと進む。

フェイトは、なのはの中の不思議な感覚を味わっていた。温かくて、ぬるぬるして、指全体を包み込む感触。時々「ぎゅっぎゅっ」と締め付けてくる。

っん。

さらに指を全部奥まで入れると、フェイトの爪が何かに当たった。

「イッ!？」

「なのは!？」

なのはがさっきとは違う痛みを示す。

「大丈夫…夫…奥まで来たみたい……」

(奥まで……子宮口!?)

「なのは、子宮口に当たったの?」

「ん、そうかも」

「じゃあ、やっぱ」

「うん、子宮口って、突かれると気持ち良いみたいだよ。

忍さんが突かれて喜んでるの見たことあるもん」

そう言われて、フェイトは考える。さっき当たったのは爪だった。フェイトは指の角度を変え、腹の部分で子宮口を押す。

なのはが呻くが、痛みとは違うようだ。フェイトは子宮口をもう一度押す。

「うん」

なのはがまた声を出す。フェイトはまた子宮口を押す。力を緩めると戻る。それを何度も繰り返す。何か重い物を揺さぶっているような感じた。

「ああ、うん」

「どんな感じなの? 気持ち良い?」

「……良く分かんない。なんか、身体の中が揺さぶられてる感じ……」

「そう」

フェイトは、揺らすのを止めて指を引き抜いた。

「あ、止めなくても……」

「でも、なのは、嘗めてる時の方が気持ちよさそうだったから」

「そうかな?」

なのはは、恥ずかしくて少し肩をすくめる。

「うん、そう見えた。だから、また嘗めてあげる」

「ありがとう。でも、フェイトちゃん疲れてない?」

「え？ そんなこと… ないよ」

口ではそう言うが、本当は疲れていた。人差し指一本で重い子宮を揺らしただけでは足りない。気絶するくらいの重傷を負った後なのだ。体力自体消耗していた。

「今日はここまでにしよう。大丈夫、時間はたっぷりあるよ。だって、私達これからずっと一緒だもん！」

「なのは♡ うん！ 私達、ずっと一緒だよ」

二人の表情はとても晴れ晴れとしていた。心地良い疲労感の中、二人はお互いを見つめ合いながら眠りについた。

あとがき

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。

今回、一冊の小説本としては過去最高の長さになってしまいました。「マリア様が望む永遠」より長いです。自分でも何エロ本にこんなに気合い入れてんだかと思えます。いや、エロ本と言うよりはグロ本というか、虐め本ですけど。幸か不幸か挿絵有りません。

あ、別にエロ本に気合い入れる事を否定しているわけではないです。今までも分量は少ないですけど気合いは入れてましたし、他の気合いの入ったエロ本好きだし。そもそも気合い入れないと本なんて出せないし。

途中、このままエロシーン無くても良いんじゃないかね？と思うことも何度か(笑) なにせ一番書きたかったのは虐めシーンなんで、別にエロ無くてもって思考が頭を過ぎりま

した。アリスガリコーダー突っ込むシーンはエロとみなすか微妙ですけど。

虐めシーンのネタ、自分で考えたのあれば、資料を参考にしたのもあれば、自分の実体験もあります。自分で受けた虐めが何個か有ります。どれかは書きませんが。でも、フェイトちゃんを精神的に肉体的に虐めるのは楽しかったです。

エロシーンしか要らない人は…… 最後の章だけ読めば良いかなど。

しかし、九歳では性的知識がなさ過ぎて苦労しました。性的に虐めようと思っても、その意味が分からない。どうしても説明的な科白が多くなります。妊娠と言われても、この頃だと、むしろ懂れていそうだし。それに、男子にぶっかけさせようにも、九歳じゃ精通まだだと。今回は無視しました。やっぱ、十一歳か十二歳くらいが適齢期でしょうね。

後なのは、濡れて帰るくらいなら相合い傘で帰れと。

取り敢えず、五月のオンリーに新刊が間に合って良かったです。最悪六月のサンクリに回すという手段もありましたが、やっぱり新刊出したいし、あまり遅らせると夏コミ

が辛くなるので。

次の新刊は夏コミになると思います。ネタは未だ考えて
ません。多分無印か^{A,S}本です。Stickersは……ぶっちゃけ
十九歳には萌えないので(爆) それにキャラもまだ把握し
切れてないので。キャラを掴んで、ネタが浮かべば十九歳
版とか、キャラとか、空港火災の頃のナカジマ姉妹とか、
カリム本とか書くかもしれません。

その時はまたよろしく願います。それでは。

'07年5月12日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』の同人誌を発表する。

傷捺

PARALLEL ACT SERIES

2007年 5月13日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>

E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。

送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

